

刀善定藤原兼吉

美濃 永珠

「善定兼吉」

両手打の打刀に完全に切替った元龜・
天王・文殊頃の刀姿に比較して、身中
は心持ち狭めて、反りは高く先なりが
強く踏張りがついている。差は長いが
片手打の愛國氣がどこかに残っている刀
姿に、細かに均して地沸の厚くついで明ろい
鉄、匂の締った軟らか味のある細直刃に
も、明ら前後の風情が感ぜられる。

平成二十七年三月二十日

鑑定刀

刃長 23.0cm (二尺四寸五分九厘) 反り 1.38cm (六分二厘) 元中 3.08cm (二寸八分)

元重 0.67cm (0.61cm) 先重 0.41cm (0.36cm) 切先長 3.25cm 差長 20.3cm (20.6cm) 差反り 0.06cm

茎中 2.33cm (2.31cm) 茎先中 1.67cm (1.62cm) 茎先重 0.67cm (0.62cm) 茎先重 0.69cm (0.66cm)

鍋造、庵棟草帯、鍋中は狭めて鍋高は尊帯、重ねと身中の尊帯に造込みとなり、元中と先中の差は頃合いに開き、切先は中切先、反りは中向反りが高めて強く先反りを加え、う元に踏張りがついに刀姿とばる。

地鉄は小板目に板目と杢目を交えん刃よりは狂がかつてよく均外、微細の地沸がつか地景が沈む。鍋地の棟よりは狂目が流れ、鉄色は黒味を帯びてよく澄升、明るく刃える。

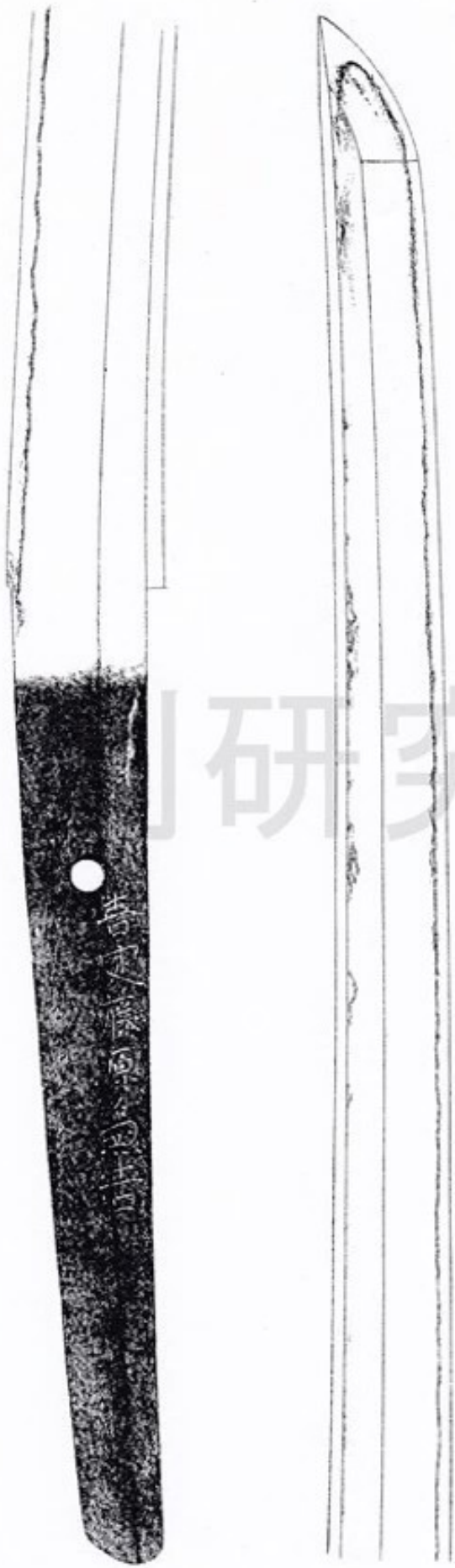
刃文は細直刃、浅く秀れかげんがあり、所々棟を焼く、差表のう元と切打に少く打のけが長われ、刃中はわずかに小足が入る。匂口は締って明るく刃える。

帽子は直刃が浅く秀れて碎け返りの尊帯は長めでやや傾く。

差はまぶ、長寸で先はやや刃方を削いだ刃上り栗尻、刃小丸の 棟 角小丸

鏡は僧担、目釘穴は一目、銘は鍋地に長銘を切る。

よく均んだ美しい地鉄と、才えて明るく締った刃が本刀の魅力で少々時代を上げて見くなる。



刀研究会

脇差 陸奥大掾三善長道

岩代 寶文

「陸奥会津住道長」 「陸奥大掾三善長道」

「陸奥大掾三善長道藤四郎」

三好藤四郎、のちに三善に姓を改める。

寶永十年（一六三三）会津に生れる。

三好政長の子、政長が正保五年（一六四八）に没すると、叔父長俊に鍛刀を承ぶという。

初銘「道長」。

万治二年（一六五九）三十七歳（陸奥大掾）と

多領、錫子道長から長道に改める。

貞享二年（一六八五）十一月十七日没 五十五歳。

法石 舟仙院東貞日堂居士。

平成二十七年三月二十日

刃長 59.4cm (一尺九寸六分)

元重 0.75cm (0.75cm)

茎中 2.73cm

錫造、庵棟やや高く、鍋中は尋常で鍋は低く、重らう厚く身中の広めの造込けとなり、切先は中切先、反りは中間反りにやや先反りの加わった貫文、延室頃の姿となる。

地鉄は小板目がよく均升、細かな地沸が付き、地景は細かく底に沈升、透くわすかに映が長われ、鍋地は狂目が流れる。刃文は互の目乱れ、互の目が集まって一つの塊となってやや両張り、所々尖り気味の刃が交じる。透出しは浅く汚れかげんに小互の目を交じえて低く透く。刃中は足葉・金助が入りわずかに砂流しを交じえる。乱れの谷に小沸がよくつく。

至は生ぶ、鍋中は尋常で鍋は低く、先は刃より重丸、刃角小丸口、棟角小内、

縁は勝ち下り、目釘穴は一個、銘は目釘穴の右上から鍋地に長銘を切る。

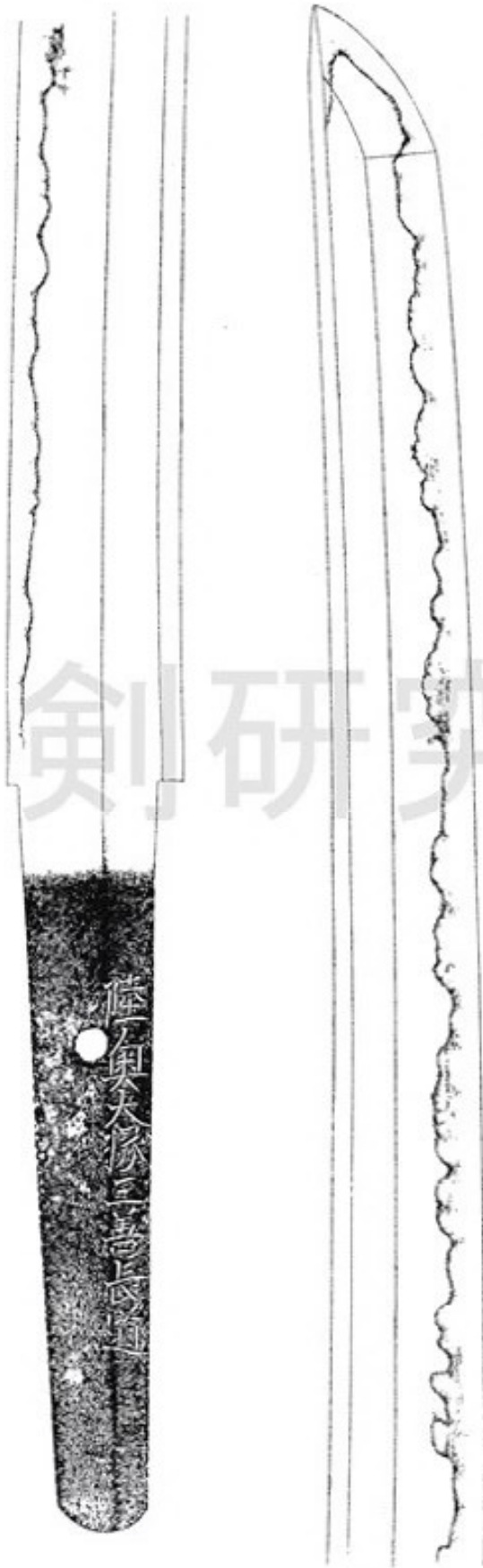
長道の特徴とも、える両張った刃の透目に小互の目を交じている。地刃健全は一振り。

帽子は横刃の上で焼中を括め、浅く汚れかげんに先は丸く返る。

反り 1.06cm (三分五厘) 元中 3.21cm (3.03cm) 先中 2.27cm (2.17cm)

先重 0.49cm (0.49cm) 切先長 3.04cm 茎長 14.5cm (15.1cm) 茎反り 無し

茎中 1.28cm 茎先重 0.73cm (0.73cm) 茎先重 0.47cm (0.47cm)



刀劍研究會

脇差 近江守法城寺橋正弘 (三代)
武蔵 元禄

「近江守法城寺橋正弘」

「菟川近江守橋正弘 法城寺廿三代」

「但州法城寺園光廿三代孫武州住橋正弘」

「近江守法城寺橋正弘」

水戸の利重が光國の命によって正弘に
入門したといわれている。

三代 城守寺
城守寺

平成二十七年三月二十日 鑑定刀

刃長 54.8cm (一尺八寸五分八厘)

元重 0.64cm (0.64cm)

茎元中 2.87cm 茎先中 1.90cm

鍋造 庵棟尊常、鍋中は尊常で鍋は低く、重ねは厚めで身中の広い造込となり、元中と先中の差は少なく、切先は中切先でやや延びかけんとなり、反りは中間反りが高くさうに先反りを加えた天初・貞字から元禄にかけての姿となる。

鉄色は黒味があり明るく冴える。

砂流しを交じえる。粒の揃った沸が厚く豊かにつき、匂口は明るく冴える。

帽子は焼中の広い直刃でフクラに添って先は小丸、返りは横身下までやや長めに焼下げる。

茎は生ふ、鍋中は尊常で鍋は低く、肉は少なく中広で脇差としては長寸、先は浅い入山形、刃角は

棟角「山」 鑑は筋違、銘は鍋造の近くから長銘を切り、「法寺橋正弘」の

文字を大きく切る。

健全で地・刃は明るく出来は見事。

反り 1.61cm (五分三厘)

先重 0.49cm (0.49cm)

元重 0.64cm (0.64cm)

切先長 3.25cm

元中 3.25cm (3.09cm)

先中 2.32cm (2.24cm)

茎長 16.7cm (17.0cm)



刀剣研究會

脇差 伊勢大塚源綱廣

寶文

「相州扇ヶ谷住源綱廣作」「相州住綱廣」

「相州住綱廣造之」「相州伊勢大塚綱廣」

「伊勢大塚綱廣」

「伊勢守綱廣」

勘右衛門(四代)の子。

万治三年(一六六〇)伊勢大塚受領。

延宝末年ころ伊勢守に転ずる。

元禄十一年(一六九六)三月十三日没八十三歳。

別に元禄十三年没ともいう。

法名 常殊。

平成二十七年三月二十日

身長 54.1cm (一尺七寸八分五厘)

元重 0.61cm (0.60cm)

茎元中 2.7cm

鑄造、庵棟尋常、鍋中は尋常で鍋は低く、身中と重ねの尋常な造込みとなり、元中と先中の差は頃合いに聞き、

切先は中切先、反りは中向反りが浅めの寶文新刀の姿となる。

地鉄は小板目に小空で所々板目を交じえてよく約升、微細の地沸が一面につき、細かな地景がよく入った美しい鉄で、

鍋地は極目が流れて肌立つ。

刃が交じる。刃中は足がよく入りわずかに砂流しを交じえ、匂は深く沸が厚くつき明るく湧える。

帽子は乱れ先は尖り気味の丸、返りは肌にかうんで長めに返る。

至は生ふ、刃方を張うせかげんに先を細め、重尻は入山形、刃角は目録 採角小内(一)

鑄は勝ち下り、目釘穴は二個、銘は長銘を鍋筋にかぶせて「綱・廣」の文字を大きく切る。

よく約んで明るい地鉄と、軟らか味のある刃えた刃交が美しい、伊勢大塚綱廣の作風を長わした一振りて

出来も素晴らしい。

鑑定刀

元中 3.11cm (2.96cm)

反り 0.70cm (三分)

先重 0.41cm (0.40cm)

茎元中 1.52cm

切先長 3.31cm

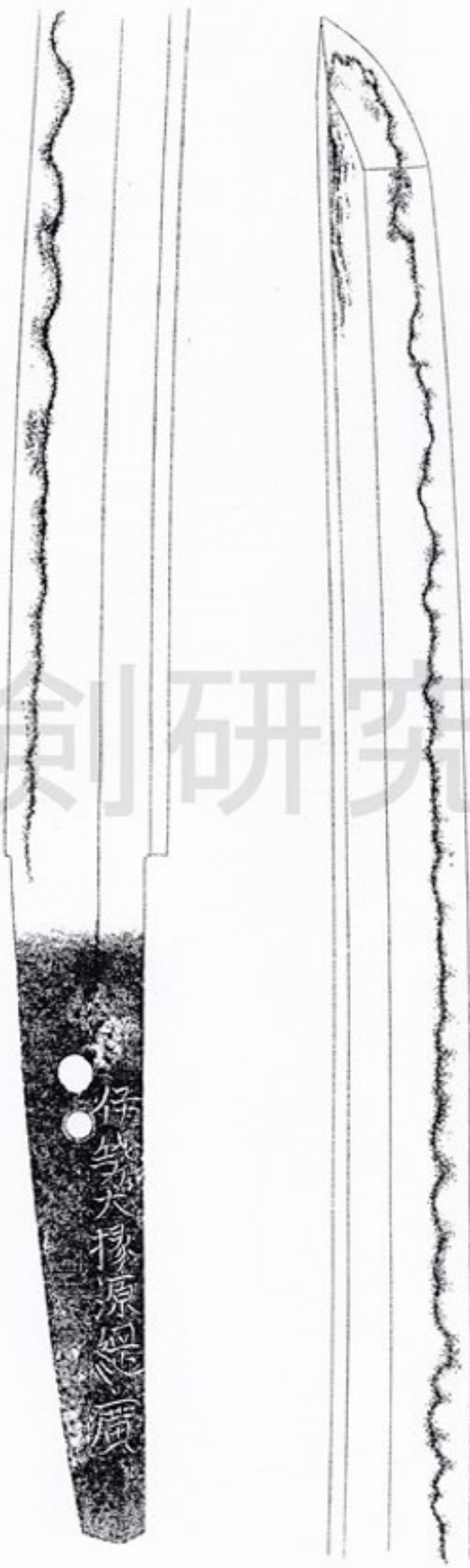
元重 0.64cm (0.63cm)

茎元重 0.29cm (0.28cm)

先中 2.17cm (2.05cm)

身長 14.1cm (14.3cm)

茎反り 3.3



伊勢大塚源綱廣



刀劍研究會

脇差 和泉守千手院盛国作

「和泉守源盛国造之」

「和泉守千手院盛国」

「和泉守盛国千手院作」

「和泉守千手院源守正作」

「武州於忍国千手院和泉守源守正作」

初銘 守正

平成二十七年三月二十日

鑑定刀

刃長 33.7cm (一尺七寸七分八厘)

元重 0.45cm (0.56cm)

茎反り わずか 茎元中 2.25cm (2.71cm)

鍋造、産棟高く、鍋中は尋常で鍋はやや高く、平肉、刃肉のよくついた身中の尋常な造込みとなり、切先は中切先でやや延び

反りは中肉反りが浅めの寶文から延びにかけての姿となる。

地鉄は小板目に板目と交互じりやや肌立ち、地沸は一面に厚くつき、地景は肌に残って表われる。地色は黒味を帯び、強く明るい見事な鉄で、鍋地は所々征目が流れる。

長のみ中は中程から横身にかけて光の強い金筋が長く鮮やかに表われ、表は中程から横身にかけて二重刃になる。

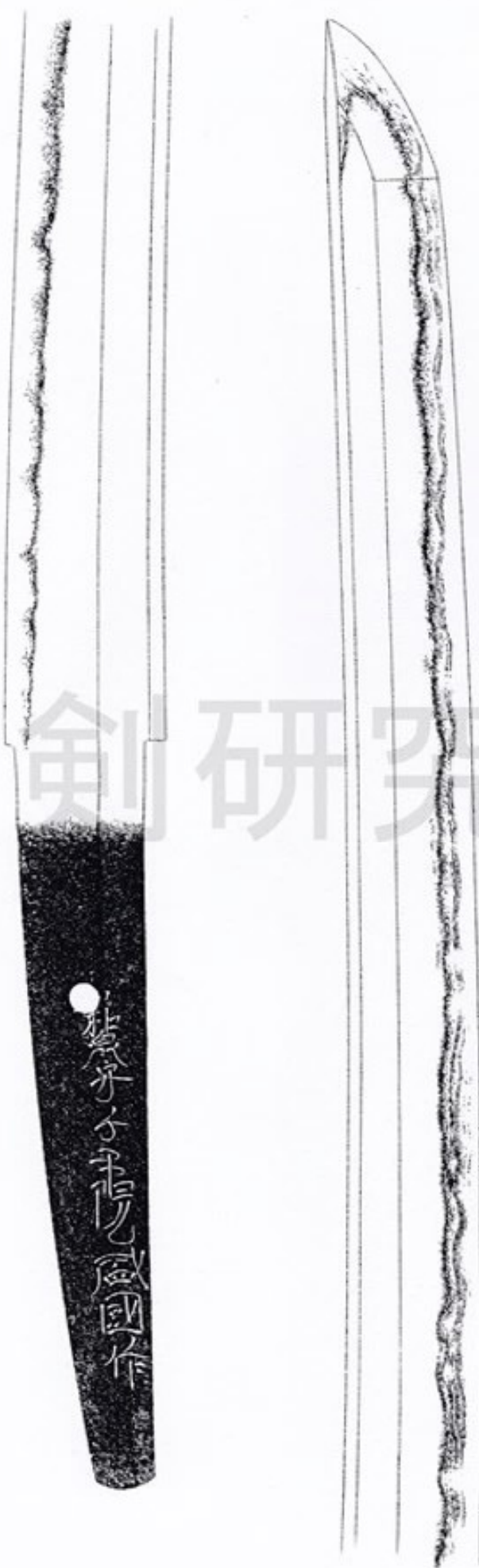
太い湯足がよく入り、匂は深く沸が厚くつき明るく冴える。

帽子は直刃で掃け湯が豊かにつき、先は小丸で返る。

肉がつき刃力をやや強うせて先を細め、茎反は粟尻、双小丸の 棟丸 ()

鑢は大筋直、目釘穴は一個、銘は目釘穴の近くから惣持の書風で鍋地にかぶせて切る。

黒味を帯びた地鉄は強く明るく、湯の豊かについた刃は明るく冴える。千手院盛国の傑出の一振り。



和泉守千手院盛国作

刀劍研究會